

道

2021・9・1

通信 No 1650



ミズヒキ

拡大運営委員会(運営委員・企画選曲委員・プログラム委員)の皆さんには検討資料送りましたが、届きましたか？不足資料がありましたので月曜日に再度送信・郵送致しました。提示した資料は(案)の段階ですので、ご意見等ありましたら今週中にはお返事ください。よろしくお願いいたします。

ところ

《米原万里さんとの微かな出会い》

(バス 福本三朗)

米原万里さんはロシア語通訳者、エッセイスト・小説家でもあり、『不実な美女か貞淑な醜女(ブスカ)』(読売文学賞)など多くの著作でも有名。1950年生。2003年卵巣がんから転移、手術拒否し、3年後鎌倉で56歳の生涯を全うした。大変な才女で、語学力はもとより、比類なき文才に溢れ、いわゆる飛び抜けた存在であった。橋本龍太郎首相の通訳でモスクワへ、またボリス・エリツイン大統領の日本での随行通訳も務めた。大統領からは「マリ」と呼ばれ、大変可愛がられたという。

万里さんの父は日本共産党常任幹部で、チェコスロバキア・プラハに党代表として家族帯同して赴任。少女時代5年間ロシア語による授業を受けた。きめ細かな授業に「最初の半年間は先生の話すことが100%分からない授業への出席は地獄だった」と。しかしマルクスの「資本論」をロシア語で読破するなど、文章読解力・分析力などその後の活躍の礎になった。

万里さんは日本帰国して高等学校卒業後、いったん舞踊学校に2年間在籍したが、ロシア語を究めるためロシア語学科のある大学に進学。当然ながら米原さんはA(アー)B(ベー)B(ヴェー)から始まる1年生ではなく、すぐ2年生授業への出席が許された。

私は親の言いつけ(「お前は頭が悪いのだから、一番前に座って休まないこと」)を忠実に守って、最前列で辞書を片手に必死の形相であった。その隣に救世主=万里さんが座ってくれ、分からない単語や文章に何度も救いの手を差し伸べてくれた。まさに神様。もっとも万里さんは分からない漢字があると、すぐ私を質問攻めに。1歳年上でもあり、さっぱりした“姉御”的存在であった。

万里さんは舞踊にも秀でており、ある会合では民族衣装を纏ってジプシーダンスを披露、出席者全員の喝采を浴びたこともあった。また私の親友が万里さんに一目ぼれした時は、私がデートのためのお膳立てをしたことも。しかし万里さんにとっては、“並みの男性”では釣り合いがとれなかったのではないだろうか。大学での前期2年間、ロシア語授業は読解・作文・会話など固定化されていたが、3年生からは科目選択式となり、万里さんと授業で肩を並べる機会は徐々に失われていった。

残念ながらその後学内外で、グループや個人的付き合いをすることはなかった。万里さんは大学卒業後出版社に1年間勤務したのち、東京大学大学院で露語・露文学専攻修士課程を修了。その後の活躍は周知のとおり。鎌倉在住時の万里さんからの年賀状では、いつも愛犬・愛猫の写真が添えられていた。

2006年5月永眠。7月には「米原万里さんを送る会」が催され、多くの関係者が故人の偉業を称えるとともに、安らかな永眠を願った。万里さんは混沌の現代を精一杯生き抜いた“知の巨人”でもあった。才能あふれる著作や功績は、永遠に私たちの記憶に残ることだろう。

なお妹ユリさんは作家・戯曲家の井上ひさしさんの妻となった。井上氏故郷の山形県山形市に「東ソーアリーナ&遅筆堂文庫」が設置され、井上氏の輝かしい足跡が遺されている。2008年秋開催された特別展「米原万里コーナー」で懐かしい思い出に浸り、新幹線の時間を忘れてしまうほどであった。